ヨーロッパ透析移植学会に参加して

秋葉　隆

第29回ヨーロッパ透析移植腎臓学会（ERA-EDTA）は1992年6月28日～7月1日フランスのパリで開催された。会場は旧パリ市内の西端にあるPalace de Congressと呼ばれる総合会議場で、地下鉄で10分でコンコルド広場や、ルーブル美術館へ行ける便利な所でした。昨年はチェコスロバキアで開催される予定が内戦のため急遽イタリアでの開催となり、非常にさびしい大会だったと聞いていましたが、今年は花の都〝パリ〟での盛大な大会となりました。参加者も4000人程と聞いています（公式発表にあらず）。

開会式は荘厳に軍楽隊の演奏で始まりJacob会長挨拶はなんとフランス語でした。後半は英語となったものの（たぶん仏、英同じことを述べたのでしょうが）、米英語文化圏に屈しないフランスの意地を見たような気がしました。本来この学会は欧州透析移植学会（EDTA）として透析移植のみをあつかい、いわゆる腎炎、腎生理には縁のない学会でした。ところが欧州腎臓学会（ERA）と合同して、大会を開くようになり、一昨年のウイーンの時には腎生理、腎炎が大半を占めた印象でした。

今年は再び透析移植が、演題数の約2／3を占める状態となり盛りだくさんの内容でした。以下にシンポジウムの主題を羅列します。

(1) ERA-EDTA患者登録からの合同報告
(2)血液浄化におけるコンピューター
(3)腎臓病におけるサイトカイン
(4)高血圧の病態と治療における最近の進歩
(5)糸球体基底膜
(6)「充分な透析」の概念
(7)腎臓移植における（免疫）寛容

これらの中で今年の圧巻はEDTA Registryのシンポジウムです。大会初日の午前に第一会場に満場の聴衆を前にregistryの結果が発表されます。先進の英、仏、独の3ケ国の間でさえ発症頻度、治療内容、成績に差がある欧州連合の状態に驚くとともに、本邦でこのような県別、地方別比較を行なったらどう反応があるか考えると興味深いものがありました。

本年の透析のテーマは心疾患と、保存期の治療法に関する考え方でした。末期腎不全患者の死因の約半数を心臓死が占めていることが報告され、本邦とほぼ一致する成績でした。一方保存期のタンパク制限は厳しい例から比較的ゆるやかな例まで約2倍の開きがあり学問としての医学と、食習慣に制限される医療のおおきなgapをみた気がしました。

本年の機械展示はFresenioを主体に非常に広く活発に行なわれました。数年来のエリスロポエチン主体から再び透析膜主体の展示となりました。なかでも粉末透析液用個人用透析装置が、私たちにはめあたらしいものでした。

全体をとおしてみると、ERA-EDTAは日本透析療法学会総会、アメリカ腎臓学会年次総会と並んで3つの大きな透析に関する情報交換の場となっていることが間違いないようです。

来年のERA-EDTA総会は、イギリスのグラスゴーで開催されるとのこと、次期開催地よりのメッセージをお伝えして稿をおわります。
「グラスゴーで又会いましょう」。

(Palace de Congress)

東京医科歯科大学　第二内科　腎センター